

1 研究主題

自分の考えをもち、生き生きと学ぶ児童の育成

～ PISA 型「読解力」の研究実践を通して～

2 主題設定の理由

(1) 昨年度の研究から

昨年度は、研究主題を「算数科学習における伝え合う力の育成」として、算数科を中心とした研究に取り組んだ。

その結果、問題解決的な学習における問題提示の工夫や、話し合いの仕方などについて、一定の成果を得ることができた。

しかし、その一方で、「伝え合う力」以前に、伝え合うべき問題を理解したり、そこから考えるという力が不足しているのではという新たな課題が出てきた。「伝え合う」と言っても、伝え合うべき課題がわからないという子どもの実態がある。

このような本校児童の実態は、平成 15 年（2003 年）7 月に OECD（経済協力開発機構）が実施した PISA 調査（生徒の学習到達度調査）で明らかになった「読解力」としての課題と大きく重なる部分であり、読解力を身につけてこそ、伝え合う力が生きてくるのであろう。

そこで、本年度は、児童の読解力の育成について、研究主題を「自分の考えをもち、生き生きと学ぶ児童の育成」として設定し、研究を進めていきたい。

3 研究主題について

(1) 「自分の考えをもち」とは

平成 15 年の中央教育審議会答申によれば、子ども達の判断力や表現力が十分に身につけておらず、また、学習への意欲も決して高くなく、学習習慣が十分に身につけていない点が指摘されている。このことは、平成 18 年度の熊本県学力調査の結果からも同じような傾向があり、本校においても同様の状況があると言える。

このような状況を好転させるためにも、子ども達には、まず学習への意欲を高めるとともに、確実な学習習慣、学習の方法を身に付けさせる必要があると考える。つまり、基礎・基本の確実な習得である。そして、単なる知識の習得だけに終わるのではなく、習得した知識をもとに、自分の生活体験や学習経験を生かし、自分はどう思うか、どうなるだろうなど、新たな課題への意欲やイメージを持たせるようにすることで、学習への意欲や学習への喜び、達成感にもつながると考える。

(2) 「生き生きと学ぶ児童」とは

「熊本型授業」では、「能動型」と「徹底型」によるメリハリのある授業展開によって、確実な基礎・基本の定着を図るとともに、子ども達の主体的な学習を生み出すことを提唱しているが、本研究主題で設定した「生き生きと学ぶ児童」とは、そうした基礎・基本の知識をもとに、自分なりの考えや意見を持ち、分かりやすい発表や表現を工夫し、課題追求に取り組む児童の姿である。

(3)「読解力」とは

PISA 調査において「読解力」は、次のように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

ここで述べる「読解力」は国語教育等で従来用いられてきた文章読み取りの「読解」ないしは「読解力」という語の意味するところとは大きく異なる。

文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものであり、以下のような特徴がある。

また、ここでの「テキスト」という言葉には、課題という意味とともに、資料・情報としての文章、図、表のことを指す。

テキストに書かれた「情報の取り出し」だけではなく、「理解・評価」(解釈・熟考)も含まれていること。

テキストを単に「読む」だけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含まれていること。

テキストの「内容」だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となること。

テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」も含まれていること。

PISA 調査は、読解の知識や技能を実生活の様々な面で直面する課題においてどの程度活用できるかを評価することを目的としており、これは現行学習指導要領がねらいとしている「生きる力」「確かな学力」と同じ方向性にある。

また、学習指導要領国語では、言語の教育としての立場を重視し、特に文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えを持ち論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じた的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることが重視されており、これらは PISA 型「読解力」と相通ずるものがある。

そこで、子どもたちの「読解力」を向上させるためには、国語科の指導のみならず、各教科及び総合的な学習の時間等の学校の教育活動全体を通じ、「考える力」を中核として、「読む力」「書く力」を総合的に高めていくことが重要である。



熊本型授業を積極的に取り入れる

各教科において取り組む・・・教科は限定しない

「考える力」としての「読む力」「書く力」の育成を

「ゆうチャレンジ」が解くことができる力を目標に

3 研究の仮説

テキストを理解・評価しながら読む力を高めるような取組の工夫や、様々なテキストから自分の考えを述べたり書いたりする機会の工夫をすれば、子どもたちは、自分の考えをもち、生き生きと学ぶようになるであろう。

4 研究の視点

本研究では、次の研究の視点を設定し、学校全体で研究を進めたい。下は研究の視点とその大まかな内容を示したものである。

(1) 視点A 課題を理解・評価しながら読む力を高めるような取組の工夫

目的に応じて理解し、解釈するための工夫（国語 他）

- ・国語科を中心とした理解、内容や筆者の意図を解釈して読むこと。

学習形態の工夫 教材・教具の工夫 ノート指導

評価しながら読むための工夫（算数・社会・理科・総合 等）

- ・内容や表現、引用や数値からの判断、自分の知識や経験と関連づけて読むこと。

学習形態の工夫 教材・教具の工夫 ノート指導

課題に即応して読むための工夫（学力充実の時間・朝夕の会 他）

- ・短時間で内容を理解し、自分の考えを書いたり、発表をすること。

ヒアリングタイム

(2) 視点B 様々なテキストから自分の考えを述べたり書いたりする機会の工夫

自分の考えを表現するための工夫（学充の時間・朝夕の会 他）

- ・テキストの内容を理解し、発表したりすること。

スピーチタイム

日常的な言語活動に生かすための工夫（学充の時間・朝夕の会 他）

- ・取り出した知識や情報を自らの生活の中で活かすこと。

日記や作文指導

様々な文章や資料を読み、自分の考えを書くための工夫（社会・理科・学充の時間 他）

- ・新聞、雑誌から読み取ること。

新聞・雑誌記事の活用

具体的内容・方法については、各専門部により検討をしてください。

(3) 専門部の担当（各学年より1名・担外の先生も分担して所属）

授業研究部・・・指導案検討・授業企画・授業評価・授業記録・校内研修の運営 等

A - 1 A - 2 B - 3

学習環境部・・・教室掲示物・校内各種掲示物・教材教具の開発 等

B - 1 B - 2 A - 3

調査研究部・・・ゆうチャレンジ・学力検査の分析と対策・児童実態調査 等